

## 〈史料紹介〉

### 矢内原忠雄の橋新宛書簡\*

——無教会伝道者から地方の信徒への手紙——

赤 江 達 也\*\*  
岩 野 祐 介\*\*\*  
黒 岩 康 博\*\*\*\*

#### 解題 矢内原忠雄と橋新の交流からみる 無教会ネットワーク

本稿では、戦前から戦後にかけて東京で活動した無教会伝道者・矢内原忠雄<sup>やないはらただお</sup>（1893-1961）が、愛媛の無教会信徒・橋新<sup>たちばなはじめ</sup>（1902-1973）に書き送った書簡 24 通、および関連史料を紹介する。

2021 年 9 月、橋新の令孫小早川直子氏から岩野祐介（関西学院大学神学部）に、橋新の蔵書・資料の一部が寄贈された。矢内原忠雄を中心とする無教会・キリスト教関連の書籍約 120 冊、雑誌 33 誌（各複数部）、ファイル 2 冊（書簡と新聞等の切り抜き）である。そのなかの矢内原忠雄の橋新宛書簡 24 通を中心に翻刻・紹介したい<sup>1)</sup>。

矢内原忠雄の橋新宛書簡の時期は、1935（昭和 10）年から 1959（昭和 34）年までの 24 年間である。これらの書簡には、内村鑑三（1861-1930）にはじまる無教会キリスト教の歴史という関心からみると、次のような意義がある。

第一に、無教会における書簡の役割がみえてくる。無教会伝道者たちは、師・内村鑑三にならって集会を主宰し個人雑誌を発行するとともに、遠

隔地の読者たちと手紙でやりとりしていた。矢内原の橋宛書簡は、無教会における遠隔的な師弟関係について知ることができる実例である。

第二に、地方における無教会信徒の活動がみえてくる。橋新は、無教会伝道者たちの雑誌・書籍の共同購入や頒布を行っており、取次的な仲介者の役割を果たしている。また、無教会伝道者の講演旅行において、現地側の企画・運営を担っている。さらにハンセン病療養所の信仰支援活動を行っている。

第三に、日中戦争批判によって矢内原が東京帝国大学を追われた矢内原事件（1937 年）を支援した信徒の活動がみえてくる。橋新の名前は、この事件の渦中において矢内原を護衛するために上京したことで知られている<sup>2)</sup>。矢内原の橋宛書簡は、戦時下に発言するキリスト教知識人と、それを支援した信徒たちの持続的な交流と活動の記録なのである。

以下では、これらの書簡を読むうえで関連すると思われる事柄について簡潔に述べておきたい。

#### 矢内原忠雄と無教会キリスト教

矢内原忠雄は、戦前から戦後にかけて活躍した

\*キーワード：無教会キリスト教、遠隔的な師弟関係、ハンセン病療養所、矢内原事件

\*\*関西学院大学社会学部教授

\*\*\*関西学院大学神学部教授

\*\*\*\*天理大学文学部准教授

1) 本稿で紹介する史料は、岩野と赤江がまず翻刻し、黒岩が全体の確認・修正を行った。解題と注は赤江が執筆し、岩野と黒岩の助言をもとに改稿して作成した。

2) 赤江達也『矢内原忠雄——戦争と知識人の使命』岩波新書、2017 年、132-133 頁。

社会学者（植民政策学・国際経済論）であり、キリスト教知識人である。矢内原事件で東京帝国大学を辞職した後は、戦時下を無教会伝道者として過ごし、敗戦直後に大学に復職。同じく無教会信徒の南原繁総長とともに新制東京大学の形成に参与し、戦後二代目の東京大学総長を務めた。

無教会とは、キリスト教著述家の内村鑑三が1900（明治33）年頃に開始したプロテスタントの信仰運動である。内村は既成の教派教団（教会）の外で、1900年に聖書講義と雑誌による伝道を開始し、その独自の立場を「無教会（主義）」と呼んだ。内村は数千・数万の読者と数百の聴衆を持ち、1930（昭和5）年の内村没後も無教会主義は継承された。1930年代には、少なくとも十数人の無教会伝道者がおり、矢内原もその一人である。

矢内原は東京帝国大学教授のまま“兼業”の伝道者となった点で、無教会内での先駆者であった<sup>3)</sup>。矢内原事件によって大学を辞した矢内原は、戦後には良心的なキリスト教知識人として広く尊敬を集めた。そして1950年代には、東京大学総長にして無教会伝道者である、という特異な位置からキリスト教的な言論活動を展開した<sup>4)</sup>。

#### 矢内原忠雄と愛媛県——故郷今治と、住友別子鉱業所の新居浜

矢内原は愛媛県の今治（富田村）の出身である。中学で神戸に出て、東京の第一高等学校・東京帝国大学に進学する。一高時代には校長・新渡戸稲造（1862-1933）の紹介で内村鑑三の門下に入り、教養主義的な学生グループ「柏会」に参加し、内村の聖書講義にも熱心に出席している。1917（大正6）年に大学を卒業すると、住友総本店に就職、愛媛県の別子鉱業所勤務となり、新居浜の社宅に暮らした。

住友の同僚には、内村門下の先輩・黒崎幸吉

（1886-1970）や親友・江原万里（1890-1933）がいた。黒崎、江原、矢内原の三者はいずれも後に無教会伝道者となるが、住友時代にも新居浜や阪神間でキリスト者として活動している。矢内原は内村の雑誌『聖書之研究』を購読して学びつづけているが、自らも伝道を行い、新居浜にキリスト教の集会を形成する<sup>5)</sup>。この集会は、矢内原が新居浜を離れた後もつづいていく。

1920（大正9）年、矢内原は東京帝国大学経済学部で教員として呼びもどされる。植民政策講座を担当していた新渡戸稲造が渡欧して国際連盟の事務次長となるにあたり、新渡戸の後任に抜擢されたのである。矢内原は欧米留学の後に『植民及植民政策』（1926年）『帝国主義下の台湾』（1929年）などの著作を次々と刊行し、植民政策学の第一人者となっていく。

矢内原は東京でも伝道を再開する。1929（昭和4）年、自宅で一、二の留学生に聖書を教えはじめ。そして1932（昭和7）年、満洲での調査旅行中に「匪賊」による列車襲撃を経験し、その危機から生還したことを契機として個人雑誌『通信』を創刊、知友に約千部を送付するようになる。矢内原は新居浜の信徒とも交流をつづけているが、その新居浜で1930年代以降に中心的な役割を果たすことになるのが橋新である。

#### 四国における無教会運動の結節点としての橋新

橋新は愛媛県新居浜で住友機械（現・住友重機械工業株式会社）に勤務し、そこで矢内原忠雄や黒崎幸吉と出会う。無教会キリスト者として矢内原に師事し、個人雑誌『通信』（1938年以降は『嘉信』）を購読するほか、ときには矢内原の講演を聴くために大阪や東京に出かけた<sup>6)</sup>。また、本稿で紹介する書簡からわかるように、矢内原と手紙で交流し、指導を仰いだ。

橋新の資料のなかに山中湖畔での矢内原の集会

3) 初期の無教会伝道者には専門の伝道者が多く、官僚や教員などの職を辞して伝道を開始した。だが、とくに戦後には、教員と兼業の無教会伝道者が増えている。

4) 史料19-2と史料20では、矢内原「総長」という呼称にかんするやりとりがある。

5) 矢内原は新居浜で伝道冊子『基督者の信仰』を執筆している。同書は新居浜の信徒の働きかけにより、矢内原が留学中の1921年に、内村鑑三の聖書研究社から内村の序文を付して刊行されている（矢内原忠雄『基督者の信仰』聖書研究社、1921年）。

6) 史料6、14、15など。

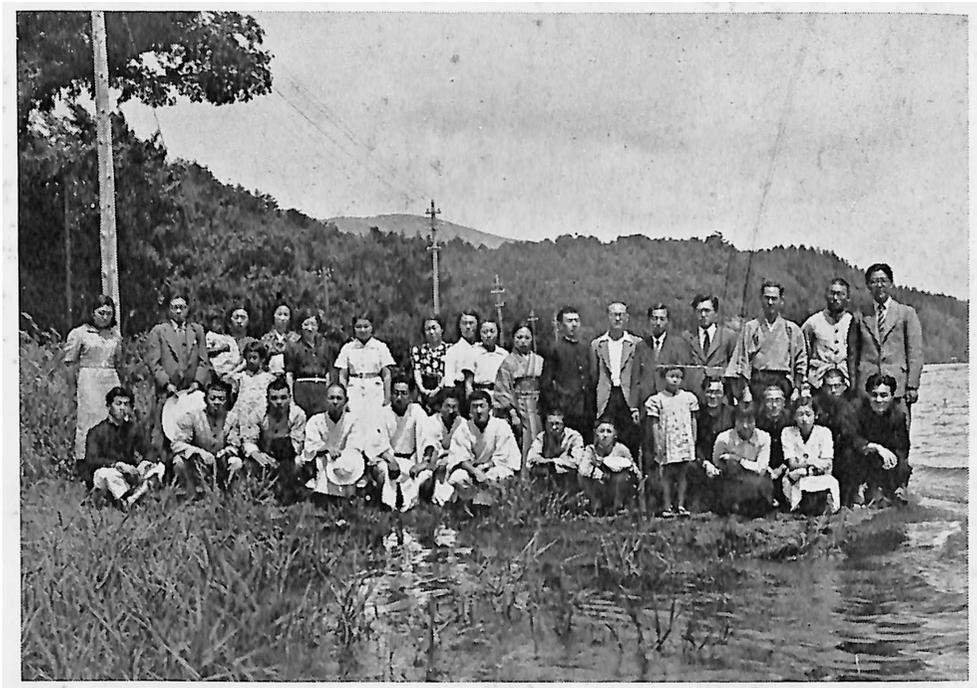


図1 矢内原忠雄の山中湖畔集会（1938年7月）  
後列右から3人目が矢内原忠雄、4人目が藤田若雄<sup>8)</sup>、8人目が初山民子<sup>9)</sup>。

の集合写真（1938年7月）がふくまれていた<sup>7)</sup>（図1）。写真の裏面には、矢内原とその家族、無教会伝道者・藤井武（1988-1930）や江原萬里の子どもらの名前が記されている。矢内原は信徒たちと家族のように親密な交流を維持しており、橋もその交流に連なっていた。

矢内原からの書簡には、信仰上の助言のほか、実務的な連絡も記されている。そのやりとりからは、橋新が「伊予」さらに四国の無教会運動において結節点のような役割を果たしていたことがみえてくる<sup>10)</sup>。

ひとつは、無教会雑誌や書籍の購入・頒布といった（小規模な）取次の役割である。史料6などからもわかるように、橋は無教会の雑誌や書籍を

他の人びとに転送している<sup>11)</sup>。こうした活動は、橋新の蔵書のなかに同号の雑誌が複数あり、宛先のメモなどがふくまれていたことからもうかがわれる。

もうひとつは、矢内原をはじめとする無教会伝道者の講演会の企画・運営である。たとえば、1952年9月の矢内原の講演旅行に際し、新居浜（住友倶楽部）での講演を実現するために橋は奔走している（史料19）。また、1959年4月20日、新居浜（住友倶楽部）での矢内原講演でも、橋新が現地の「照会先」となっている<sup>12)</sup>。

#### 橋新によるハンセン病療養所への信仰支援活動

さらに橋はハンセン病療養所のキリスト教支援

7) 本稿で紹介する写真はすべて、橋新の蔵書・資料にふくまれていたものである。

8) 藤田若雄（1912-1977）は矢内原忠雄に師事した無教会信徒で、後に労働問題研究者（東京大学）、無教会伝道者となる。

9) 初山民子は、矢内原集会の信徒で、矢内原の助手・速記者。史料7、13、17で言及されている。

10) 矢内原夫人の矢内原恵子は「伊予」における橋の重要性に言及している（史料25）。

11) 史料11では、矢内原が橋の負担を気遣い、直接送付すると記されている。

12) 『嘉信』の「雑報」欄では、新居浜講演の「照会先」として「橋新氏」の名前と住所が告知されている（『矢内原忠雄全集』第25巻、岩波書店、1965年、883頁）。

活動を行っている。矢内原忠雄や黒崎幸吉らは1930年代以降、無教会伝道者として各地のハンセン病療養所を訪問（慰問）するのだが、香川県高松の大島療養所（現・国立療養所大島青松園<sup>13)</sup>）については、橘が仲介者として重要な役割を果たしている（史料2、16<sup>14)</sup>。

矢内原は1935年に初めて大島療養所を訪問しているが、その際に大島療養所の長田穂波（嘉吉）（1891-1945）との連絡・調整役を橘が担っている（史料2<sup>15)</sup>。また、黒崎幸吉による大島訪問を実現するために、橘が熱心に働きかけていた

ことがうかがわれる（史料6）。

矢内原の書簡（史料5、7）からは、矢内原が自著『民族と平和』（岩波書店、1936年）を、橘も無教会関連の書籍などを大島療養所に寄贈していることがわかる。長田穂波の日記にも、次のように記されている<sup>16)</sup>。1936年5月19日、「橘兄より研究書と藤井全集とを送らふかと言ふ。／そこで呉れと申送る、愛の故なら喜んで頂く。愛の故でなくば、断然に拒絶するべきなりだ」。そして五日後の5月24日、「橘兄より菓子とロマ書、ガラテヤ書、注解書を頂く！」。



図2 矢内原忠雄の第二回大島訪問（1937年9月）

前列左から5人目が院長、6人目から矢内原忠雄、長男・矢内原伊作、橘新、三島甫。  
後列左から3人目（忠雄の後）が三宅清泉（官之治）、4人目（伊作の後）が長田穂波。

- 13) 1941（昭和16）年に香川県から厚生省に移管され「国立らい療養所大島青松園」と改称、さらに1946（昭和21）年に「国立療養所大島青松園」と改称される。
- 14) 矢内原とハンセン病療養所については、赤江達也『矢内原忠雄』112-114頁を参照。矢内原・橘新と大島療養所の交流については、阿部安成・石居人也「聖書の生——国立療養所大島青松園キリスト教霊交会という交流の場所」（滋賀大学経済学部『Working Paper Series』No.164、2012年3月）などを参照。
- 15) 長田穂波（嘉吉）は詩人として知られる人物で、ハンセン病患者として大島療養所に長く住み、三宅清泉（官之治）らとともに霊交会を創立、1919（大正8）年から『靈交』を発行した。『靈交』は戦中に特高警察の干渉と圧迫を受け、1940（昭和15）年に265号で終刊となる。本稿では、史料27として、長田穂波の橘新宛ハガキを紹介している。
- 16) 阿部安成「〈資料紹介〉長田穂波日記1936年——療養所のなかの生の痕跡」滋賀大学経済経営研究所『彦根論叢』373号、2008年。

矢内原は1937年9月に第二回目の大島訪問を果たす。そのときの集合写真が橋新の蔵書にふくまれていたので紹介しておきたい(図2)。すぐ後でみるように、この集合写真が撮影される直前に、矢内原事件の起点である検閲による全文削除処分が発覚している。矢内原の大島訪問と矢内原事件というふたつの意味で、この集合写真は橋にとって意義深いものであったと考えられる。

### 橋新と矢内原事件

矢内原事件と橋のかかわりについては、橋自身の文章によって知られている<sup>17)</sup>。今回の寄贈資料のなかに、橋の回想に関連する史料がふくまれていたので、ここに紹介しておきたい。

矢内原事件(1937年)でとくに問題となるのは、『中央公論』9月号巻頭の論説「国家の理想」と、東京・日比谷の市政講堂での藤井武記念講演会の講演「神の国」(10月1日)である。橋はその双方に立ち会っている。

1937年8月24日、矢内原と橋らは大島を訪問する。高松の便船乗り場の売店で、同行者が『中央公論』を購入する。論説「国家の理想」が検閲で全文削除処分となっていることを知った矢内原は、「やりおったな」とつぶやいたという<sup>18)</sup>。先に掲げた写真(図2)は、その後に渡った大島で撮影されている。

10月1日の講演「神の国」では、矢内原の身を案じた橋が上京する。藤井武記念講演会で、矢内原が藤井武にならって国家批判を語ることが予想されたからである。矢内原を護衛できるように、橋らは前方の席に陣取った。最前列に官憲が居並ぶ異様な雰囲気ではあったが、約350人の聴衆が集まり、講演会は無事に終わる。

それから二日後の10月3日、矢内原は『基督者の信仰』(改訂4版、一粒社、1937年10月)の扉に献辞を付して橋に贈っている。橋の蔵書にそのときの『基督者の信仰』がふくまれていた。矢内原の献辞は、下記のとおり(図3)。

藤井武第七周年記念講演会への御上京を感謝して

一九三七年十月三日 矢内原忠雄／橋新兄

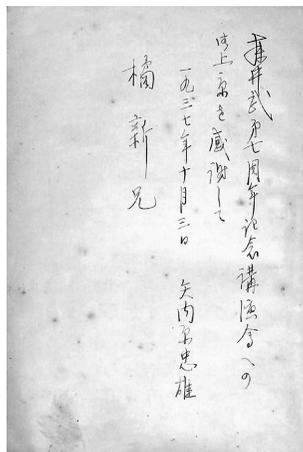


図3 矢内原忠雄から橋新への献辞  
(1937年10月3日)(『基督者の信仰』扉)

橋は矢内原の講演「神の国」の内容を大阪の黒崎幸吉集会で報告しようと考えていた。そこで舩山民子による速記録の閲覧を求めた。だが、矢内原はその危険を説いて橋を叱り、閲覧や報告を禁じた。その後、同月末に新居浜で『通信』47号(10月号)を受けとった橋は、講演「神の国」の記録がそのまま掲載されていることにおどろく。しかも「愛媛県新居浜から遠路わざわざ此の講演会を案じて上京出席せられし橋君を始め、全国教友による支援を厚く感謝する」と記されていた<sup>19)</sup>。矢内原が危惧したとおり、この講演録が決定打となって、矢内原は辞職へと追い込まれる。

なぜ矢内原は速記録の閲覧や報告を禁じながら、その内容を雑誌に掲載したのか。それはおそらく橋のような信徒、黒崎幸吉と黒崎集会の信徒たちの危険を避けようとしたためである。その一方で、雑誌『通信』への掲載という自分の責任の範囲において、国家批判を表明することを決断したのである。

矢内原と橋の師弟関係は、矢内原事件の重要な

- 17) 橋新「『神の国』講演会と数日後の先生」南原繁ほか編『矢内原忠雄——信仰・学問・生涯』岩波書店、1968年。  
18) 橋新「『神の国』講演会と数日後の先生」227頁、矢内原忠雄「此夏記〔1937年〕」『矢内原忠雄全集』第26巻、岩波書店、1965年、597頁。  
19) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第18巻、岩波書店、1964年、654頁。

要素である。それゆえ、矢内原と橋にかんする史料は、矢内原事件を検討していくうえでの新たな手がかりなのである。

### 史料について

本稿では、矢内原忠雄の橋新宛書簡 24 通、および講演旅行の日程表（史料 19-1）、橋新から矢内原宛の電報（史料 19-2）などを掲載する。

なお、矢内原の橋新宛書簡 24 通のうち、6 通はすでに『矢内原忠雄全集』第 29 卷<sup>20)</sup>に収録されているが、本稿ではあらためて翻刻した。これら 6 通は橋新が提供し、採録後に返送されているが、その際の矢内原恵子から橋新宛のハガキ 2 通もあわせて掲載した。そのうち 1 通は書簡の送付と選定にかんするやりとりで（史料 25）、もう 1 通は書簡返送時の礼状である（史料 26）。そのほか、長田嘉吉（穂波）の橋新宛ハガキ（史料 27）、無教会伝道者・富田和久の橋新宛封書（史料 28）も掲載している。

矢内原の書簡の保存状態からは、橋新が整理して保管していたことがわかる。封筒は付属しておらず、便箋やハガキがファイルに綴じられていた。ハガキの一部は、矢内原の著書に挟まれ、あるいは貼り付けられていた。たとえば、1959 年 12 月 26 日付のハガキ（史料 24）は、矢内原忠雄『聖書講義 黙示録』（角川書店、1948 年）の扉に貼り付けられており、その右側に「矢内原先生より頂いた最後の御端書 一九六〇年」と記されていた。

そのほかにも、書面の欄外に日付や記号（赤鉛筆による◎）が書き加えられている場合がある。これらは『矢内原忠雄全集』用の選定時に橋が記入したと考えられる。ただし、日付の推定が疑わしい場合には、書簡の内容にもとづいてあらためて推定し、修正している（史料 1、2、24）。

とくに興味深いのは、赤鉛筆での傍線である。朱傍線は史料 9 に二ヶ所、史料 10 と史料 23 にそれぞれ一ヶ所みられる。このうち、史料 9 の「橋和尚」は矢内原によるユーモラスな評言である。

他の三ヶ所は、橋が矢内原からの助言として注目していたことを示唆している。こうした書簡のやりとり／書簡をめぐる諸実践から、無教会ネットワークにおける遠隔的な師弟関係がみえてくるはずである。

### 凡例

- ・旧字は新字にあらためた。異体字・略字も新字にあらためた。ただし、旧字を残した場合がある。
- ・踊り字（ゝ、ゝ、ゝなど）は、原文のとおり表記している。くの字点は、ひらがなになおした<sup>21)</sup>。
- ・句点がない場合には、適宜、句点を付した<sup>22)</sup>。
- ・／は改行を示す。
- ・見せ消しは抹消線で示した。
- ・判読不明は■で表した。抹消線などにより判読不明な場合には■と表した。
- ・字句の挿入は【 】で示した。
- ・〔 〕内は翻刻者による補足を示す。

### 史料一覧

#### 矢内原忠雄の橋新宛書簡

- (1) 橋新宛封書（1935 年 3 月 12 日）
- (2) 橋新宛封書（1935 年 8 月 7 日）（『矢内原忠雄全集』第 29 卷、118-119 頁）
- (3) 橋新宛封書（1935 年 9 月 29 日）
- (4) 橋新宛封書（1935 年 12 月 31 日）
- (5) 橋新宛封書（1936 年 8 月 5 日）（『矢内原忠雄全集』第 29 卷、134 頁）
- (6) 橋新宛封書（1936 年 10 月 2 日）
- (7) 橋新宛封書（1936 年 10 月 25 日）（『矢内原忠雄全集』第 29 卷、138-139 頁）
- (8) 橋新宛封書（1936 年 11 月 5 日）
- (9) 橋新宛封書（1937 年 7 月 4 日）
- (10) 橋新宛封書（1938 年 4 月）（『矢内原忠雄全集』第 29 卷、152 頁）
- (11) 橋新宛封書（1938 年 9 月 15 日）

20) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第 29 卷、岩波書店、1965 年。

21) 史料 6 の「とうとう」、史料 11 の「なかなか」「ポツポツ」、史料 14 の「とうとう」、史料 17 の「なかなか」。

22) 史料 1、3、6、12、15、16、21、23、24、25、27、28 で句点を補っている。とくに毛筆の手紙（史料 16）、矢内原恵子のハガキ（史料 25）の原文は句読点が付されていない。

- (12) 橋新宛封書 (1941年3月23日)
- (13) 橋新宛封書 (1941年7月)
- (14) 橋新宛封書 (1942年11月12日)
- (15) 橋新宛封書 (1942年11月30日)
- (16) 橋新宛封書 (1944年6月12日) (『矢内原忠雄全集』第29巻、265-266頁)
- (17) 橋新宛ハガキ (1945年6月5日)
- (18) 橋新宛封書 (1945年9月10日)
- (19) 橋新宛封書 (1952年9月18日)
- (19-1) 別紙 矢内原総長講演会日程 (1952年9月18日)
- (19-2) 橋新の矢内原宛電報 (1952年9月)
- (20) 橋新宛ハガキ (1952年9月22日)
- (21) 橋新宛封書 (1952年10月3日)
- (22) 橋新宛封書 (1953年4月13日) (『矢内原忠雄全集』第29巻、390頁)
- (23) 橋新宛封書 (1955年7月9日)
- (24) 橋新宛ハガキ (1959年12月26日)

#### 矢内原恵子の橋新宛書簡

- (25) 矢内原恵子の橋新宛ハガキ (1965年2月1日)
- (26) 矢内原恵子の橋新宛ハガキ (1965年7月16日)

#### その他の書簡

- (27) 長田嘉吉 (穂波) の橋新宛ハガキ (1943年10月26日)
- (28) 富田和久の橋新宛封書 (1968年3月24日)

#### 図表

- 図1 矢内原忠雄の山中湖畔集会 (1938年7月)
- 図2 矢内原忠雄の第二回大島訪問 (1937年9月)
- 図3 矢内原忠雄から橋新への献辞 (1937年10月3日) (『基督者の信仰』扉)
- 表1 矢内原総長講演会日程 (1952年9月18日)
- 図4 矢内原総長講演会日程 (1952年9月18日)
- 図5 橋新の矢内原忠雄宛電報 (1952年9月)

#### 史料 矢内原忠雄の橋新宛書簡

- (1) 橋新宛封書 (1935年3月12日)  
[欄外上]「3月12日」  
[欄外右]「昭八年 内村先生五周年上京前」<sup>23)</sup>

御手紙拝見しました。全集<sup>24)</sup>送料わざわざ御追加下され恐縮でした。月末には遠路御出京の由、御奮発の御事と存じます。併し此度の大講演会<sup>25)</sup>は必ず御出京の労に酬ひる処があると信じます。三十一日午前には塚本先生<sup>26)</sup>の御集会に御出席を御勧め致します。拙宅の集りは其日には休む予定ですから。又三十日の日の行動は今から予定が立ちませんから御約束出来かねます。三十日の夜柏木講堂<sup>27)</sup>でか、又は三十一日の昼大講演会の前後会場で御会ひするのが一番確実であります。両度共参会後私は暫く止まって居ますから其時に御さがし下さい。先は右御返事まで。矢内原忠雄  
／橋新様

23) 欄外に鉛筆で「昭八年」(1933年)と記されているが、正しくは1935(昭和10)年3月12日と推定される。なお、昭和八年には、内村鑑三“三周年”記念講演会が3月26日(東京)、4月3日(大阪・京都)、4月5日(名古屋)に各地で開催されている。

24) 塚本虎二・矢内原忠雄編『藤井武全集』全12巻(藤井武全集刊行会、1931-1932年)。1930年7月に病没した無教会伝道者・藤井武の全集で、実質的な編集作業は矢内原が担った。その後、1938-1940年に矢内原の単独編集で『藤井武全集』全11巻が再刊される(第1・2巻が合本となり、全11巻になる)。戦後にも、矢内原忠雄・小池辰雄編『藤井武選集』全9巻(岩岡書店、1949-1957年)が刊行された。

25) 1935(昭和10)年3月31日に開催された「内村先生五周年記念基督教大講演会」。明治神宮外苑日本青年館で開催された。講師は畔上賢造、黒崎幸吉、塚本虎二らで、矢内原は登壇していない(矢内原忠雄『通信』22号、1935年3月、4頁)。

26) 塚本虎二(1885-1973)は無教会伝道者。

27)「柏木講堂」は、内村鑑三が使用した、東京の新宿・柏木の講堂。大阪の実業家・今井樟太郎の寄付により建設されたため「今井館」とも呼ばれた。なお、この講堂は1935年に目黒区中根に移築され、戦後には矢内原が聖書講義に用いた。

(2) 橋新宛封書 (1935年8月7日) (『矢内原忠雄全集』第29巻、118-119頁)

[1 枚目欄外右] 昭9年<sup>28)</sup>

[1 枚目欄外右上] © [朱]<sup>29)</sup>

[2 枚目欄外上] 8月7日

御手紙有難く存じました。山中では貴兄の真摯なる赤心に動かされました。かかる赤心に接したのは此度の講習会<sup>30)</sup>に於ける最大の恩恵であり感動でありました。黒崎玉川<sup>31)</sup>両先生並に私の全講演を以てしても貴兄の赤心の発露一つに及びません。信仰は知識でもなく、行為でもなく、真心であります。貴兄は美しい真心を神様から賜はつて居られます。何卒それに益々キリストの光を宿して下さい。信仰にかがやく真心は朝日に映ゆる富士山よりも美であり荘厳であります。

新居浜の兄<sup>32)</sup>に対するいつに変わらぬ御心づかひを感謝します。今日兄に対し『日常の罪の雑念と救』のことに就て長い手紙を書きました。之も貴兄の愛に感じたからです。それから香川県大島の療養所にも御一緒に参りませう。(併し決して手を御出しにならぬ様!!)

貴兄は日曜日が一番易いのでせう。然らば大なる事故起らざる限り九月八日の日曜日と予定致しておきます。若し貴兄が日曜以外でも出られる様ならば念の爲め其事を御一報下さい。大島の方は御手数乍ら貴兄が長田穂波氏<sup>33)</sup>と連絡を御取り下さい。(大島行は九月六、七、八日の中に致し度)。

先は右御返事まで 匆々／矢内原忠雄／橋新兄

(3) 橋新宛封書 (1935年9月29日)

[1 枚目欄外上] 9月29日

橋新様

御手紙二回有難く拝見致しました。御撮影の写真も有難く存じました。当方からも早く御返事致すべきでしたが、何分多忙にて失礼致しました。

新居浜では文字通り終始御世話下され御親切うれしく存じました。今治を経て十四日夜福岡著、翌十五日は日曜日にて早速松尾さん等の集会にて話をさせられました<sup>34)</sup>。大学の講義は十六日から毎日四時間、講義とその準備との為め何をする暇もなく、又水曜日は松尾さん宅の祈禱会、廿一日(土)は午後七時半から当地教育会館にて公開聖書講演会、「基督教に於ける平和の理想」といふ題にて二時間半ばかり演説を致しました。廿二日(日)は同じく教育会館にて「イザヤ書大意」と題し午前九時-正午、午後一時-四時、講演をいたし、それから五時半迄懇談会、其の翌日廿三日は熊本にて夜八時から十時迄【聖書】講演、翌廿四日(祭日)は熊本、福岡の教友数名と雨中阿蘇山に登りその夜福岡に帰りました。廿五日からは又毎日四時間宛の大学の講義、廿六七日は【その上】大学内にて聖書講演、今日の日曜日は又松尾兄等の福岡聖書講演会にて話をしました。明日【(三十日)】午後三時を以て大学の講義終るべく、直に(午後六時の汽車)にて当地を発し十月一日朝大阪著、その夜大坂にて基督教講演をしてから東京に帰る筈です。誠に多忙な事でしたが幸に健康がどうやら保たれて義務を果させて頂いたことは誠に感謝の至りです。いろいろ申上度きも時間無く、右御報告並に御礼迄。長田穂波氏の手紙今暫く拝借いたし置きます。

福岡市にて 矢内原忠雄

(4) 橋新宛封書 (1935年12月31日)

十二月廿一日付御手紙有難く存じました。色々

28) 欄外に鉛筆で「昭9年」と記されているが、正しくは1935(昭和10)年と推定される。なお、『矢内原忠雄全集』第29巻では1934(昭和9)年とされている。

29) 赤鉛筆の◎は『矢内原忠雄全集』のための書簡選定の印と考えられる(以下同様)。

30) 矢内原は1935(昭和10)年7月21-27日、山中湖畔での黒崎幸吉聖書講習会に参加している。

31) 黒崎幸吉と玉川直重。玉川直重(1890-1979)は新約聖書ギリシア語研究者で、1934-1938年に神田盾夫・鈴木俊郎らと『ギリシア語聖書研究』を刊行した。

32) 矢内原の実兄・矢内原安昌。

33) 大島療養所と長田穂波については解題を参照。

34) 矢内原は1935(昭和10)年9月7日から10月2日にかけて四国・九州で講演旅行を行い、九州帝国大学で講義している。

のニュース愉快に拝読しました。古フロックコートを長田穂波氏が一著に及んだ姿を想像して面白く思ひます。今年も今日で終ります。いろいろの事がありました。去るものは去らしめ、新しき希望の一年を迎へることを喜びます。後のものを忘れ、前のものを望み標準に向つて走るのみです。

平安と希望に満てる新年を御迎へあらんことを。／敬具

一九三五年十二月卅一日夜 矢内原忠雄／橋新様

(5) 橋新宛封書（1936年8月5日）（『矢内原忠雄全集』第29巻、134頁）

〔1枚目欄外右〕昭11年？

〔1枚目欄外右上〕◎〔朱〕

御忙しき処を御手紙下され有難く存じました。先日は新居浜の飴を有難う。私達も一しよに頂戴しました。貴兄五時より早天祈禱なされる由、私達も丁度五時から湖辺で早天祈禱をして居ます。最初は私が子供等を引きつれて到著の翌朝から実行したのを、黒崎さんが見られて、皆でやろうといふ事になり、今では大阪より来て居る江藤氏一家をも加へて二十名足らずの人数になつて居ます。黒崎さん<sup>35)</sup>では二男の義雄君が病気で寝て居られます。

私は九日に帰京し十三日に北海道に向け出発します。その間に大車輪で藤井選集<sup>36)</sup>の整理、発送をすませる考です。七月中頃東京でみんなを督励し製本屋のオヤヂよろしくで奮闘して、本職の製本屋に原稿を渡し、それをすませてから当地へ来たのです（二十日）。もう製本出来して居る筈です。全集は貴兄が持つて居られ、長田氏へは選集を贈られる最初の御考通りになされる事を、私は御勧め致します。全集は貴兄のは手許に止留まつ

て、貴兄御自身の本城を守らねばなりません。

「民族と平和」<sup>37)</sup>の出版はむつかしい経路を経ましたが結局発行に相成、今の処は無事の様子です。もう大丈夫でせう。これの発行には一寸苦しみました。私の処に寄贈用の余分が残つて居ませんが、一冊だけ私から大島療養所（一般図書室）へ進呈することと致します。（九日に帰京後取計ひます）。

北海道、東北講演旅行<sup>38)</sup>からの帰京は二十八日になります。一汗かいて参りませう。

山中湖畔にて／八月五日 矢内原／橋愛兄

(6) 橋新宛封書（1936年10月2日）

拝啓 九月二十八日付一円五十銭入の御手紙有難う御座いました。選集代金のこと度々通知が變つて御心配を御かけ致しました。之は送付する様【始めに予定して】御通知した種類と実際に送付すした種類とが異つたから、あんな風に混雑したのでした。

『選集』<sup>39)</sup>は御遠慮なく、買はれた御当人が熟読して下さい。他人の書物を借りて読むよりも自分の書物を読む方がよく読めるものです。併し御都合若くは御考へにより他の希望者に転讓なさるならば、小生の手許にある希望者二三を左に記しますから、直接あなたの方から「第何巻を譲つてもよいが入用か」と照会して下さい。私から聞いたといふ事を御申添下さい。（私は仲介又は照会の労を免して頂きます）。

第一巻希望、久留米市梅満町 熊丸虎雄

①

第三巻以下希望、山形県西田川郡温海村道路工区担任官舎 伊藤国雄 ⑤

どれ【第何巻】でもよし、東京市渋谷区羽沢町五二 山崎氏方 重藤威夫 ②

あなたの方へ御送りしたものは

第一巻 四円、第二、第三、第五、第六巻は

35) 黒崎幸吉の山中湖畔の別荘。矢内原と黒崎は山中湖畔に隣接する別荘を持っており、夏季には集会を開催した。

36) 『藤井武選集』全6巻（1936年）は、藤井武の個人雑誌『旧約と新約』の残部を利用して解体・再編集したもので、225冊が作成・製本され、1936（昭和11）年6-8月に申込者に送付された（『矢内原忠雄全集』第24巻、岩波書店、1965年、842-844頁）。

37) 矢内原忠雄『民族と平和』岩波書店、1936年6月25日刊行。

38) 1936（昭和11）年8月13-28日、矢内原は北海道・東北講演旅行を行っている。

39) 『藤井武選集』（1936年）のこと。

二円（丙種）

第四卷（丙種）一円五十銭

ですから此の値段で御譲り下さい。併し前述の如く御譲りなさるべき義務は【勿論】無く、御自分で（買はれし青年）読まれることが結構と存じます。

黒崎先生を大島へとうとう引つ張り出され七【る】由〔朱傍線〕、橘君の熱心の前には誰でも抗し得ないでせう。とにかく僕もこのニュースは【特別に】非常なる愉快感謝を以て聞きました。

先は右迄。矢内原生／十月二日／橘新様

(7) 橘新宛封書（1936年10月25日）（『矢内原忠雄全集』第29巻、138-139頁）  
〔3枚目欄外上〕10月25日 1936

御手紙有難う存じました。わざわざ大阪迄御出かけ下され小生としては百万の援軍を得たるが如く心強く感じました。さういふ気持は講演者【の身】にならねばよく御理解出来ぬかもわかりませんが、信仰の友が遠方からわざわざ来られる事、その顔が講演会場に見えるだけでも実に大なる力となり後援となるのであります。大阪駅で貴君の顔を見た時、私には勇気がグツと入りました。貴君は講演を聞きに来られたつもりでも、私【に】は貴君が援軍に来てくれた様に思ひました。それが信仰の友情といふものでしょう。

「橘君、金を使ふね」ではありません。「金を使はせるね」と言つたのです。それは「私が貴君に金を使はせる」といふ意味で申したのです。藤井武選集を長田穂波氏の分と新居浜の分とを貴君が支払つたり、幕屋の嘆き<sup>40</sup>も注文せられたり、通

信も沢山取つてくれたり、其の上わざわざ大阪迄講演会の場【為】に来てくれたり、私のために貴君が多くの費用を惜しまれない事を、私は平生感心もしたり恐縮もしたりして居るので、あの時ああ言つたのです。「【私が貴君に】金を使はせて済まないね」といふ意味です。

「幕屋の嘆き」は全部で四十三部作られて、頒布を受けた東京及地方の者より得た費用で額縁〔縁〕を買ひ皆の姓名を添えて今日感謝のしるしとして初山さん<sup>41</sup>に呈しました。尚二部残つて居ますから之を別便で貴君に進呈します（此の分は実費御送付に及びません。私から進呈致します）。

大阪での御感話は真面目で結構でした。「田中龍夫氏<sup>42</sup>は天国に行くか地獄に行くか」と気に病んでる人もあるさうですが、浅野さん<sup>43</sup>の文章によると祈の人だったさうですから多分天国に行かれるのでしようし、又其の様に希望します。併し少くとも藤井さんと並び称する様な信仰のたちの人では有りません。田中さんが十字架信仰を公然標榜せられざりし事は誠に惜しむべきでありました（基督教の立場から）。併し他人は他人、自分は自分でありますから、自分の信ずる信仰の途を歩んで行き度いと存じます。

東京での講演会<sup>44</sup>のビラ（塚本さん作成）見本に一枚入れておきます。東京は少し遠いからいくら橘君でも一寸来られまいと思ひ、「金を使はせる事」にもなるまいと安心して御覧に入れる次第なり。

矢内原忠雄／橘新兄

(8) 橘新宛封書（1936年11月5日）  
〔1枚目欄外上〕No.1

40) 藤井武『幕屋の嘆き』謄写版、1936年。初山民子が『旧約と新約』3号を謄写・製本したもので、限定40部（43部）、1部10銭（送料込）として『通信』36号（1936年9月）で告知された（『矢内原忠雄全集』第24巻、844-845頁）。

41) 初山民子は矢内原の速記者・助手（解題の図1を参照）。

42) 田中龍夫（1881-1936）は、内村集会の信徒で、芝浦製作所社員、工学博士の発明家。関東大震災後に伝道を開始、「電子は神である」と唱えて1929（昭和4）年に内村に破門されるが、その後も交友はつづいた。1930（昭和5）年からは雑誌『修養』を発行して独自の宗教思想を唱えた。1936（昭和11）年7月13日に病没。この時期、田中龍夫の信仰と救済をめぐる無教会信徒の間で議論があったことがわかる。

43) 浅野猶三郎（1878-1944）は独立伝道者。内村鑑三に師事し、1906（明治39）年に東京帝国大学（物理学科）を退学して、独立伝道を開始。1936年から雑誌『祈の生活』を刊行した。

44) 1936（昭和11）年11月3日、東京・明治生命館で開催されたキリスト教講演会で、講師は塚本虎二、矢内原忠雄、黒崎幸吉、司会は金沢常雄。

[2 枚目欄外上] No.2

[3 枚目欄外上] No.3

[4 枚目欄外上] No.4

[5 枚目欄外上] No.5

主に在りて御健在を祝します。大島訪問は黒崎兄始め沢山同行にて大島の教友達もさぞ喜ばれし事と存じ、光景彷彿として想像せられます。同地よりのよせ書き有難う。

田中龍夫氏の問題、——田中氏の信仰と藤井さんの信仰とを並び称することは誤と思ひます。併し田中氏には田中氏の考もあり又人物としては立派な人でありますからその点は認めねばなりません。又浅野さんを批評することも慎まねばなりません。寧ろ田中氏が教友の間から疎外されて居る場合にありてその人物とその祈とその善意とを——すべてその善き方面をば敢然として弁護し■紹介せられたる其【浅野兄】の友情に【私は】尊敬を払ふべきひます。

「喜の音」<sup>45)</sup>に於ける綱領宣言も貴兄の気に入らなかつた様子ですが、あれも「喜の音」主筆の浅見氏の人物と経歴とを御存知ならば、そんなに癪にさわらずに同情的に読むことが出来たでしょう。浅見氏は【長く】農夫でした。平信徒中の平信徒で、概念的なインテリではありません。而して教会問題で長年戦を経て来り、今日尚戦の中にある老戦士です。あの綱領は「戦」の中に於て掲げられしものとして読まねばなりません。何でもない時にあんな風に綱領など掲げるとわざとらしくていけますまいが、戦闘■に際して旗幟を鮮明にする為めには綱領も時に必要でせう。

○信仰は熱心であらねばならないが、他人に対しては寛容たるを要します。殊に信仰の同志に対しては然りです。世の中には憤慨すべき事が一杯あります。併しその憤慨は主として不信者の世界に対して向けるべきでせう。同志の事は余計に気がつくでせうが、あまり癪にさわらぬ方がよいで

せう。

藤井選集熊丸、伊藤両氏に御譲り被下、私としても大満足です。伊藤といふ人私は【直接】知りませんが此夏山形県鶴岡で講演した時間きに来た一人らしくあります。道路工夫か、又は技手位の人らしく想像します。真面目な人であることは其の手紙でよくわかります。東京重藤といふ人は通信読者ではありません。他の人の紹介で選集を希望して来た一人です。この人には選集を譲って頂かなくて結構です。私と何の関係もなき人です。

第二巻は貴兄の御手許に保管して下さい。小生自身も選集第一巻だけ記念として自分のものとし、他は全部譲りました。

大島講演御出版の計画、御志は多としますが藤本正高氏<sup>46)</sup>の講演と一緒にして（一つの本にまとめて）出すことは御断り致します。それは藤本氏をどうのかうのと言ふわけではありませんが、同君と私とは未だ公私交際極めて薄く、友人関係に入つて居ません。だから黒崎・藤本・矢内原とかういふ風に三人肩肩を組む程の親しい間柄でないからです。黒崎さんと私とだけなら、講演筆記と一緒にして出されることに勿論異議なく、私も非常に喜びます（大島の兄弟姉妹の慰めとして）。併しそれでは藤本君に対して貴兄が具合がわるいでしょう。だから此の講演集出版の考は御止めに■つては如何ですか。

東京講演会についての問い合わせの同文電報は【失礼乍ら】愚電でした。激励電報は講演終了後落手しました。我々は大なる事か小なる事か知りませんが真剣に語りました。遠方の貴兄等が心にかけて下されしことを感謝します。

非常に疲れたので今日夕方一人で山中に来ました。明後日は東京から七、八人やつて来て此処で日曜の集りを致します。

それでは之にてさようなら。村上君よろしく願ひます。松尾逸郎兄丁度上京中にて先日の講演

45) 『喜の音』(よろこびのおとずれ)は、無教会伝道者の浅見仙作(1868-1952)が1931(昭和6)年から刊行した月刊誌。1937(昭和12)年12月に77号が発禁となるが、その後も隔月刊で継続。浅見は戦中に反戦的言動や再臨信仰のために治安維持法違反などで検挙されるが、矢内原や塚本虎二らの支援を受け、1945(昭和20)年6月に裁判長・三宅正太郎から無罪判決を受けた。

46) 藤本正高(1904-1967)は無教会伝道者。

会に出てくれました。

十一月五日夜 山中湖畔にて 矢内原忠雄／橋新様

(9) 橋新宛封書 (1937年7月4日)

[1枚目欄外右上] ◎ [朱]

阿蘇と山中<sup>47)</sup>、心二つに身は一つ、／福岡の松尾さんは、山中へ【も】行き度いが地元主催者側として阿蘇へ出なければならぬと言つて居られるから、橋和尚 [朱傍線]<sup>48)</sup>阿蘇入をしても一人で淋しいといふ事はないでせう。／山中へ来ても失望せられるといふ事はないでせう。棒を立てて [朱傍線]、倒れた方角に行くのも一案。

ゴデー復活<sup>49)</sup>二十部先日発送しました。七・二〇御送りでしたが、二十部代六・〇〇 送料・五〇 計六・五〇で、七十銭余分でした。之は仮りに通信代の中へ記帳して置きましたが、他の用途 (若くは返金) は指図があればそれに従ひますから、御一報下さい。

此の夏には山陰、山陽旅行の考です。(通信で御承知の通り)。どうも健康に自信が十分ありませんが (神経痛)、暑くなれば神経痛も少しはらくになるでせうと思ひます。ボンヤリ休んで居るわけにも行かず、出馬と決めた次第です。時間と健康とが許せば新居浜へも渡り度いと思ひますが、之はどうなりますか、全然未定であります。

奥様の御安産を祈ります。さよなら

七月四日 矢内原忠雄／橋新様

(10) 橋新宛封書 (1938年4月) (『矢内原忠雄全集』第29巻、152頁)

[欄外右上] ◎ [朱]

御手紙有難う。藤井全集代金の振替も確かに受

取ました。大金の御奮発にて、一寸感動しました。藤井全集も広告したからには、五百部無くとも実行しなければなりません。(今の処百六、七十部申込あります。併し九月迄ですから増すに違ひありません)

貴君近頃の御手紙によると、度々疲労、微恙等の模様で、気にかかります。心身を使ひ過ぎぬ様にして下さい。如何に丈夫な体でも、使ひ過ぎはいけません。私も今度身体がひまになつて、始めて従来如何に心身を酷使して居たが、又それが善くなかつたか、といふ事を覚りました。

[上部欄外追記] 殊に貴君は年齢上、目下身体の更新期にあるから、一層健康に注意して、過労を避くる必要あり。

「嘉信」<sup>50)</sup>についてもいつも温き御配慮を有難く存じます。なかなか思ふ様に善いものが出来ません。一号二号は相当予備を印刷したのですが売切となりました。三号は印刷部数を増した為め、残部があります。雑誌旧号の沢山残って在庫品が溜るのは感心しません。何でも物は少い目、足りない目の方が善い様です。 [朱傍線]

(11) 橋新宛封書 (1938年9月15日)

[1枚目欄外右横] 昭13年

[1枚目欄外右上] ◎ [朱]

[2枚目欄外上] 13年9月15日

十二日付御手紙有難う。御元気で三人分の御労働、御苦勞に存じます。小生も怠らずに仕事して居ます。イザヤ書第一講三年目に百点の御採点にあづかり、思はず破顔一笑といふところ。もう十年も経つて貴兄の御子さんが青年となり親父の言ふ事をなかなか聞かなくなりでもすれば其時は百二十点位の採点になるでしょう。

藤井全集のことにつき御骨折深く感謝します。有力なる精神的後援にて大変励みとなります。小

47) 熊本県の阿蘇は矢内原の講演旅行、山梨県の山中は黒崎幸吉の講演会。矢内原は1937 (昭和12) 年8月15日から9月3日にかけて中部・山陰・中国・四国・関西講演旅行を行っている。

48) 「橋和尚」は、橋に対する矢内原の評言である。この書簡の『矢内原忠雄全集』収録について、矢内原恵子の書簡 (史料25) で言及されている。

49) ゴデーは、スイスの新約聖書学者フレデリック・ルイ・ゴデー [ゴデー、ゴオデー] (Frédéric Louis Godet)。「復活」は、ゴデー (西岡虎造訳)『基督の復活』若林書店、1935年。

50) 『嘉信』は矢内原の雑誌、『通信』の後身。大学を辞職した矢内原は、1938 (昭和13) 年1月に『嘉信』を創刊し、「專業」の独立伝道者となる。

生は五百部に満たずとも実行と決意した時は二百部位（払込済）のものでした。実行と決すればその準備さへすればよいので、予約総部数のことは興味なく又忙しくもあって数を調べずに居ましたが一昨夜調べさせたら五二〇部といふことでした。その後もポツポツ増えて居ますから六〇〇乃至六五〇部位にはなるかと存じます。上成績で御座いませう。

配本、貴兄に御願するのはとても御面倒でせうから、直接送本致しませう。送本は今回は我々自分でやるだけの余力ありませんので人に頼むつもりです。

色々有難う。一言御礼まで。／矢内原忠雄／橋新様

(12) 橋新宛封書（1941年3月23日）

三月廿日附御手紙拝見仕候。

看護婦さんのこと、本人の志望も固き様であり、家庭でも承知といふことであれば、希望通り療養所に行かれることがよいと思ひます。長島がよいと信じます（看護婦として）。光田園長<sup>51)</sup>の指導の下にあることが本人の為めによいと思ひます。長島へは内田正規君<sup>52)</sup>が時々話に行く様子ですから信仰上の指導も得られると思ひます。

信仰と知識との問題、今多く説明する暇がありません。併し橋君も「わからない問題」を一つや二つ持つて居ることもよいでせう。【但し】「黒崎先生や矢内原」■を別扱ひにすることだけは御止めになる必要があると思ひます。明朝大坂へ向け出発します。

三月廿三日夜 矢内原忠雄／橋新様

(13) 橋新宛封書（1941年7月）

御多忙の中を御手紙下され感激しました。奥様

御子様御病臥中の由、神様の御憐憫による御恢復を祈ります。貴君が困難山積の中にありて屈せず眩かずに信仰に立つておられることを此上もなく尊敬します。小生にはとても出来ないことでもあります。神様が昼も夜も貴君を御支へ下さることを祈り奉ります。殊に貴君が御自身の公私多忙、波瀾万丈の中にありながら福音の為に、又病者に対する愛の為に、御尽力下さることは、まことに有難きことでもあります。主、貴君の愛労に酬ひ給はんことを！

小生の満洲旅行は先方講演会主催者側の都合にて中止となりました。それで此の夏は静かに当地（山中湖）にて過します。八月廿三日から五日間当地で聖書講習会<sup>53)</sup>を開く外は、何も「活動」のない休暇を過すこととせませう。

「嘉信」送り先のこと承知。但し塩沼<sup>54)</sup>、横田両氏はたしか御自分でも前金を払込んで居られると思ひます（今、手もとに名簿がないので不正確ですが）。愛生園<sup>55)</sup>へは初山さんから、敬愛園<sup>56)</sup>へは小生から寄贈してあります。

(14) 橋新宛封書（1942年11月12日）

〔欄外上〕17年11月12日

御手紙有難う。御健在大慶の至りです。小生も元気です。黒崎さん御出張の由、同氏の忠実なる新居浜訪問には敬服いたします。小生はどうもおつくうになつていけません。大阪へは此の秋はとうとう行けませんでした。嘉信も五ヶ年経ちました。来年は又来年の事です。何も思ひ煩ふことはありません。

十二月に同封ビラの通り特別講演会<sup>57)</sup>を開きます。今度は小生の独演であります。御加禱御声援下さい。ビラ一枚は御序での時、兄<sup>58)</sup>に渡して下

51) 光田健輔（みつだけんすけ）（1876-1964）は病理学者、長島愛生園初代園長。

52) 内田正規は岡山県の結核療養者、無教会信徒で『祈の友』や『清流』を刊行した（矢内原忠雄「小出かずと内田正規」『矢内原忠雄全集』第25巻、岩波書店、1965年、269-276頁を参照）。

53) 1941（昭和16）年8月23日から28日にかけて、洗心楼旅館で開催された第四回山中湖畔聖書講習会。

54) 塩沼英之助（1903-1979）は医師、エスペランティスト。鹿児島県の星塚敬愛園園長、沖縄県の愛楽園初代園長をつとめた。

55) 岡山県の長島愛生園。

56) 鹿児島県の星塚敬愛園。

57) 1942（昭和17）年12月6日に東京赤坂三會堂で開催された矢内原の講演会で、演題は「基督教の主張と反省」。

58) 矢内原の実兄・矢内原安昌。

さい。記念の爲めであります。

矢内原忠雄／橋新様

(15) 橋新宛封書 (1942年11月30日)

〔欄外上〕17年11月30日

講演会の爲め御上京下さる由驚きました。併し喜びます。どうか来て下さい。〕

荷物の配達駅は「目黒」駅です。併し東京市内なら何駅迄の切符を買はれても、私方へ(目黒駅から)配達してくれます。〕

十二月六日午前、私方の集会は休みます。五日午後二時—四時拙宅にて土曜学校あります。それ迄に御著京なら出席せられて差支ありません。〕

六日の講演会は四時半頃に終了する予定ですが、その後で夕食を御馳走しますから、その御つもりで居て下さい。尤も汽車の時間の御都合が有りましたら致し方ありませんが。〕

嘉信十一月号三部別便で御送りしました。／矢内原忠雄／橋新様

(16) 橋新宛封書 (1944年6月12日) (『矢内原忠雄全集』第29巻、265-266頁)

〔毛筆〕

拝啓 過日は新居浜及び高松大島にて<sup>59)</sup>大変御世話様に相成度々按摩などして頂き大いに恐縮感謝致しました。御家庭の大打撃<sup>60)</sup>に不拘益々信仰を堅くして主に依頼みて居られます御様子を見まして胸が溢れました。本当に主の御助けを貴兄並に貴家の上に祈ります。

飛燕草の「感ずるまゝに」、涙を以て拝見しま

した。飛燕草の精華は「病床リレー日記」(50-65ページ)と貴兄の「感ずるまゝに」であります<sup>61)</sup>。家内も貴兄の御真実に大いに感銘した様子です。「ウソが無いからよろしい」と彼女は申しました。かういふ事について家内の直観的判断は間違つたことありません。全く彼女の言葉の通りです。

振替で参拾円の御献金を頂きました。貴兄も御入費多端でありませうのに——併し有難く頂いておきます。

先般の旅行からは五月二十三日無事帰宅しました。其後何かと忙しく暮してゐます。帰宅して新居浜の話などしましたら其後数日経つてから家内が「橋さんの御子供さんに物を送つて上げたい」と言ひ出しました。家内も忙しいので未だ小包をつくつて居ませんがその中に御送り申上げることゝ存じます。物は運動靴とブラウズです。之は貴兄よりの御献金到着のずつと前から家内が全く自発的に申出たことですから左様御承知下さるやうお願いします。運動靴は買ってあつたのです【が】勝<sup>62)</sup>が大きくなつたので不用となつてゐたもの、ブラウズは家内の著たものですが小さくなつて著られなくなつたので橋さんの御嬢さんに著て頂き度いと申してゐます。近日中に小包にして御送り致すでせうが序でを以て私より前触致し置きます。

嘉信は他誌のやうに「【時局の要請に應へて】自発的廃刊」などは致しません<sup>63)</sup>。目下当局と一戦中です。その存続を主張するこそ嘉信が時局の要請に應へる道なりと信じてやつてゐます。御加禱を乞ふ。

六月十二日 矢内原忠雄／橋新君

59) 1944 (昭和19)年5月2-23日、矢内原の近畿・中国・九州講演旅行。新居浜と高松大島をふくめ、矢内原は大16回の講演を行っている(『矢内原忠雄全集』第25巻、岩波書店、1965年、706-707頁)。

60) 橋新夫人・橋せき(1910-1944)が、同年1月28日に病気で逝去している。

61) 村上喜一編『飛燕草』村上喜一〔非売品〕、1944年(10月20日印刷、11月1日発行)所収の村上喜一・久子「病床リレー日記」(50-65頁)、橋新「感ずるまゝに」(104-107頁、目次では「感ぜしまゝに」)。村上喜一は別子鉱業所選鉱工場長などを務め、新居浜惣開の無教会集会の中心人物であった。『飛燕草』は1943(昭和18)年6月11日、同日に逝去した新居浜の信徒・村上ミネと村上久子——村上喜一の母と夫人——を記念する小冊子である。同年9月の脱稿後に黒崎幸吉・塚本虎二・矢内原忠雄らに送付され、黒崎幸吉の揮毫、塚本虎二「死の恩恵」(転載)などを付して1944年11月に発行されている。

62) 矢内原忠雄の三男・矢内原勝(かつ)(1926-2003)。後の経済学者(慶応義塾大学)。

63) 1944(昭和19)年の統廃合により、キリスト教雑誌はプロテスタント三誌、カトリック二誌にくわえ、無教会一誌のみが認可された。無教会の一誌は塚本虎二の『聖書知識』。矢内原は1944年中は『嘉信』を継続し、1945(昭和20)年1月からは『嘉信會報』と改称し、東京空襲で印刷所が焼けるとガリ版で発行した。

(17) 橋新宛ハガキ (1945年6月5日)  
 [使用済ハガキに紙を貼って再利用している]  
 [消印] 目黒 20.6.5  
 [宛名] 愛媛県新居浜市前田／橋新様  
 [差出人] 東京市目黒区自由ヶ丘 292／矢内原忠雄／六月五日

[本文]

五月廿三日附御手紙昨日到着、拝見致しました。御平安を喜びます。教友会館被害写真は悲惨です。会館の取毀しは賛成です。用紙、原紙の御心配下され、感謝々々。少しづつですが、皆さんが心配して下さるので、最近の会報程度ならば数回分の準備がありますから、貴方のは御手紙の通り、そちらでへ御保管下されて結構です。東京へは小包郵便停止せられて居ますが、鎌倉へは差出せませんから、お送り下さる時はその方法を御利用下さい。(宛先は会報第五号「雑記」にあり)。原稿紙でも何でも、「紙」ならば何でも入用です。

五月廿三日深夜の帝都空襲にて藤井洋君<sup>64)</sup>、初山民子さん共に罹災全焼。初山さんは足に負傷(但し軽傷)。石河画伯<sup>65)</sup>も同日罹災全焼。拙宅は無事。日曜午前はサムエル前書、午後はミルトンの樂園喪失を講義して居ます。この春から畠を始めましたが、此はなかなかうまく行きません。此頃は旅行が出来ないので、畠仕事で自然にしたしみ、頭を休めます。

社用でもあれば上京しなさい。今の東京を見て置くのも有益でせう。お宿は拙宅で致しますから御遠慮なくお泊り下さい。」小生の歯科医通ひはまだ続いてあります。併しもう痛みはありません。大体元気で居ります。

(18) 橋新宛封書 (1945年9月10日)

八月廿一日附御手紙並に御同封の原紙、封筒等無事落手致しました。御厚意あつく御礼申上ます。先便申上げました通り、篠原氏の御取計ひにより印刷用紙入手致し、印刷所も交渉出来ましたので、嘉信九月号から印刷に復します。思ふとは

りの活字が無く、体裁よくありませんが、併し思ひの外早く印刷に復することが出来て喜ばしく思ひます。なほ用意の為め謄写の方の準備も怠らずして置き度いと思ひます。

但し原紙用紙共少しづつ郵送して下さるのは貴君の方にも御手数であり、又当方としても紙に折れ目がついて傷みますと、使用上不都合でありますから、今後は少量づつ御発送は中止せられ、後日東京宛小包郵便がきくやうになった時に、まとめて(成るべく折れ目のつかぬやうに包装して)御送附下さるやうお願い致します。急ぐ必要はありません。

講演会を致したいのですが、会場等未だに準備が出来ません。御上京成るならば其時がおよろしいと思ひますが、期日等全く予定が立ちませんので、今申上げることが出来ません。準備が出来たらお知らせ致しませう。毎日米機がやかましい程、上をとび廻って居ます。

九月十日 矢内原生／橋兄

(19) 橋新宛封書 (1952年9月18日)

拝啓 別紙<sup>66)</sup>の日程にて松山、今治、西条へ行きます。最初県庁の方では新居浜市でも講演希望のやうに申して居ましたので、内諾を与へておいたのですが、其後衆議院解散、総選挙といふことに相成、新居浜市からは中止の旨申して来ました。住友関係の会社から、廿六日午後四時半-六時の講演(クラブにて)を申込んで来ましたが、その時は新居浜市中止後であつたので、他の約束をしてしまった後でしたから、会社から申込の日時ではどうしても都合つかず、断りの書面を出しました。従って今回は新居浜へ行く予定は消滅しました。貴兄や他の教友たちにお会ひする機会も得られないと思ひ、その点残念に存じます。(或

一寸右、だまつて居るのも悪いと思って、御知らせ致します。

九月十八日 矢内原忠雄／橋新様

(19-1) 別紙 矢内原総長講演会日程 (1952年9

64) 藤井洋(ひろし)は藤井武の長男。藤井武が1930年7月に病没した後、五人の遺児の後見役を矢内原が務めた。

65) 石河光哉(いしこみつや)(1894-1979)は画家、無教会信徒。

66) 史料 19-1 のこと。

表1 矢内原総長講演会日程 (1952年9月18日)

日	時間	場所	主催者
九月廿六日	〔夜〕〇時	今治発 墓参及其他	富田村
九月廿五日	自二〇時 至二二時三〇分	今治市 日吉中学校	今治市
	自一三時 至一四時三〇分	西条倉敷レヨン講堂	倉敷レヨン株式会社
	自一〇時 至一一時三〇分	国立愛媛療養所 訪問	
九月廿四日	自二二時三〇分 至二四時三〇分	市庁ホール	愛媛県(広報文化課)
	自一四時三〇分 至一六時三〇分	市庁ホール	教育委員会(社会教育課)
	自一〇時三〇分 至一一時三〇分	愛媛大学講堂	愛媛大学

矢内原総長講演会日程〔昭〕

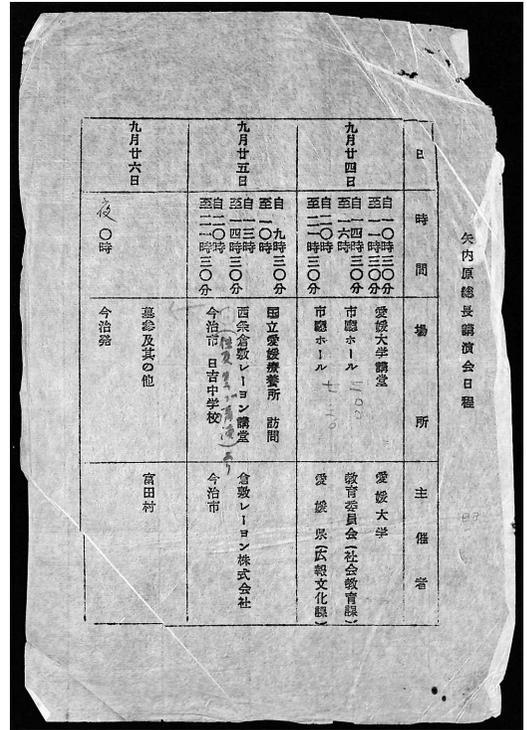


図4 矢内原総長講演会日程 (1952年9月18日)

ス■」ゴ /サイリヨコウ」二六ヒ/ジ コクト  
ハズ 二四/マツヤマユクタチハナ

月18日〔史料19の添付資料〕(表1、図4)  
〔活字印刷。手書部分は [ ] で示した〕

(19-2) 橋新の矢内原宛電報 (1952年9月)〔史料19への応答〕(図5)  
〔2枚目欄外左〕新居浜市前田 橋新

電報頼信紙

発信人

居所 愛媛県新居浜市惣開

氏名 井華鋳業株式会社別子鋳業所

宛名 トウキヨウト メグロク/ジユウガオカ  
二九二/ヤナイハラ タダオ

本文 トウダ イソウチヨウ/ラムカヘエヌハヤ  
ムナ/シ」サイジ ヤウマデ/コラレ『ニイハ  
マ』ヘコ/ラレヌ『ニンゲ ンヤ/ナイハラセン  
セイ』ヲ/カナシム」ゼ ンスミ/トモネツボウ

〔1枚目上 下書き〕

東大総長を迎/へ得ぬはやむなし/西條まで来られ/新居浜へこられぬ/人間矢内原先生/を悲む、会社/熱意あり全住友/熱望す、御再慮/乞ふ 廿六日時/刻不問/二四日 松山行く/(橋)

(20) 橋新宛ハガキ (1952年9月22日)

郵便往復はがき/返信

〔宛名〕愛媛県新居浜局区内 前田/機械社宅/橋新様〔2行墨抹アリ〕

〔差出人〕東京都目黒区自由ヶ丘二九二/矢内原忠雄

長文の電報受取ました。「総長」と「人間」とを区別してお考へになる考へ方は、少なくとも私に対しては適当致しません。私を批難なさるなら、全面的に批難なさればよいでしょう。御自分たちのために悲しむといふなら話はわかりますが、

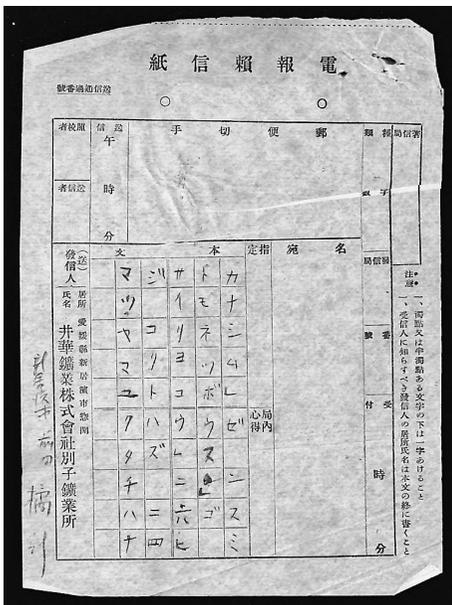


図5 橋新の矢内原忠雄宛電報（1952年9月）

「私のために悲しむ」といふのは、友人の声ではなく、批評家の言です。それなら私にも言ひ分がたくさんあります。

出発の支度をしなければならぬので、これだ

けに致します。

九月廿三日 朝

(21) 橋新宛封書（1952年10月3日<sup>67)</sup>）

前略 其後御子様方の御容態及御奥様の看護勞れ如何で入しやいませうか御案じ申上て居ります。一度御見舞旁御伺ひ申すべきを帰京を急ぎました為め失礼いたしました。申訳御座いません。何卒上よりの癒しのみ手の加はります様御祈り申上ます。

さて此度は種々御配慮いたゞき誠に有難ふ存じました。初めて御目もじいたしました皆様に主にある御愛を感謝申上ます。只御期待に添ふ事が出来ませんで深く恥じ入る次第で御座います。幾重にも御赦し頂き度ふ存じます。

卅日は雨の為め延ばしまして卅一日午前十一時五二分新居浜発にて一昨一日午前七時十分海上汽車共に無事に帰京いたしました。以上。

(22) 橋新宛封書（1953年4月13日）（『矢内原忠雄全集』第29巻、390頁）

〔欄外上〕◎〔朱〕

〔欄外左〕昭廿八年

〔野紙〕「民主々義研究特別委員会」

信雄君<sup>68)</sup>の帰るのことにことづけて一筆いたします。先日は御手紙拝見しました。又嘉信前金も受取ました。御家庭の平和のために祈ります。すべての困難に打ちかつ道は自分がキリストの十字架にしがみついて離れないことです<sup>69)</sup>〔朱傍線〕。キリストの十字架を家庭の柱としてそれにしがみついて絶対に離れずに居れば家庭は治まつて来ます。そして凡ての事によりて信仰が深められ神によりたのむ心が強くなつて行けばそれが人生の幸福です。富田の兄のこといつも変わらず御心に掛けて下さいまして心より感謝申上ます。

四月十三日 矢内原忠雄／橋新様

(23) 橋新宛封書（1955年7月9日）

67) 日付は手紙の内容からの推定である。

68) 矢内原信雄は、矢内原忠雄の実兄・矢内原安昌の次男。

69) 「十字架にしがみついて離れないこと」という一節が、史料25（矢内原恵子の橋新宛ハガキ）において「十字架にしがみつけ」として言及されている。

〔罫紙〕「社会科学研究所」

拝啓

御書面拝見しました。御家庭の問題や御仕事のことなどで困難の中を通つて居られることを承り御同情申上ます。何の御助けも致さず申しわけありません。神が貴兄を憐んで御守りと導きを与へ給ふやう祈ります。人生は苦難の谷ですが、早くぬけ出し度くても神様の御許しがあるまではやはり此世で働かなくてはなりません。神は必ずこれに耐える力を貴君に御与へ下さるでせう記念碑揮毫のことは御断り致しますから、貴兄よりその旨ハツキリ御伝へ下さい。富田村のは全く特別でして、他の先例とはなりません。

昨日東京で黒崎さんに会ひました。ブルンナー博士送別会<sup>70)</sup>の席でした。これから北海道に行かれるといつて頗る御元気でした。

小生も忙しく暮して居ます。

先は右まで。／七月九日 矢内原忠雄／橋新様  
二伸 安富未亡人益子姉が新居浜にかへり、信雄方に同居することになりました。何かと御世話になることと思ひます。よろしく願ひます。

(24) 橋新宛ハガキ (1959年12月26日)

〔矢内原忠雄『聖書講義 黙示録』扉に貼付〕  
〔ハガキ右側〕矢内原先生より頂いた最後の御端書。一九六〇年<sup>71)</sup>

クリスマスの平安を貴家の上にいるります。聖書講義「黙示録」<sup>72)</sup>は品切で、~~当分出来てきません。~~御送金あつたもの如何致しましょうか。一応御返金した方がよければ左様いたします。したが、今日出来てきました。別便でお送りします。

ブルンナー博士の小冊子<sup>73)</sup>三部別便でも同封し

て送りました。一部三〇円送料一六円で計一〇六円【九〇円】貴下の嘉信前金から引いておきます。

右大変おくれましたが事務的な事だけ申上ました。当方無事くらしています。

十二月廿六日 矢内原忠雄

矢内原恵子の橋新宛書簡

(25) 矢内原恵子の橋新宛ハガキ (1965年2月1日)

〔消印〕目黒 40.2.1 後 6-12

〔宛先〕新居浜市繁本町七〇二／橋新様

〔差出人〕東京都目黒区自由ヶ丘 ■■■の■■■

〔朱傍線〕／矢内原恵子

橋様 お手紙拝見お元気の御様子およろこび申上げます。先生<sup>74)</sup>の全集は二十七巻で完了のはづで御座いましたが先生の日記、封書を多く出すことにいたしましたのでもう二巻、都合二十九巻になりました。「橋和尚」<sup>75)</sup>も出しますが仰言せのとり「十字架にしがみつけ」<sup>76)</sup>は先生らしい表現で皆（読者）様のよき援助となる言葉と思ひますからそれも発表することにいたします。お寒さが厳しう御座います。橋様の御存在も伊予ではまことに任が重いですから神様のお加護をお祈り致します。

(26) 矢内原恵子の橋新宛ハガキ (1965年7月16日)

〔矢内原全集完了と書簡返送の礼状〕

〔文面は印刷、日付（十六）と宛名（橋新）のみ手書き〕

初夏の候と相成りました。皆様には、神様の御恩寵のもとに御平安でいらっしゃいますか。

70) エミール・ブルンナー (Emil Brunner) はスイスの神学者。1953年から1955年にかけて国際基督教大学 (ICU) で教え、その間に塚本虎二をはじめとする無教会キリスト者と親しく交流した。

71) 橋は「一九六〇年」と記しているが、ハガキの内容からは1959 (昭和34)年と推定できる。

72) 矢内原忠雄『聖書講義 黙示録』角川書店、1948年。

73) エミール・ブルンナー (矢内原忠雄・高橋三郎訳)『日本の無教会運動』(山鳩叢書1) 嘉信社、1959年12月。

74) 矢内原忠雄のこと。

75) 「橋和尚」については、1937年7月4日付書簡 (史料9)を参照。

76) 「十字架にしがみつけ」は、1953年4月13日付書簡 (史料22)を参照。

矢内原全集発行に就きましては、大変御協力下さいまして、主人の書簡をお送り下さいましたことを厚く御礼申し上げます。

お蔭様で、二十九巻をもって無事完了することが出来ました。永い間、拝借いたしました書簡、感謝をもって御返送申し上げます。ありがとうございます御座いました。

なお、皆様の上に、神様の限りない御愛と御力添えの豊かでありますようお願い申し上げます。

昭和四十年七月十六日／矢内原恵子／橋新様

#### その他の書簡

(27) 長田嘉吉（穂波）の橋新宛ハガキ<sup>77)</sup>（1943年10月26日）

〔消印〕 18.10.26

〔宛先〕 愛媛県新居浜市前田／住友病院前／橋新様

〔差出人〕 香川県木田郡庵治村大島／長田嘉吉／十月二十五日

時局は益々切迫いたし島の生活にも大いに影響して参りました。然し満洲、ビルマ、フィリピン、

印度等々の独立は出埃及記〔出エジプト記〕を見るやうに聖戦の意を深くいたし誠に喜しく存じます。銃後のおつとめ一入でせう。御家内御安然何よりと存じます。村上兄御同情に絶えず御送物感謝いたします。最近恵ちゃんも元気に見えます。向寒御自愛を。

(28) 富田和久<sup>78)</sup>の橋新宛封書（1968年3月24日）

橋新様

お元気にお過しでしょうか。タイプ長い間拝借して恐縮しました。「知ること・信ずること」ようやく終わりました。話は60点という評点をいただきましたので、多少手を加えて、努力してみましたが、少しくは読み易くなったでしょうか。御高評ねがいたく存じます。タイプは別便でお送りいたします。私としては60点が、いつまでも残るのは、少々しんどい気がいたします。

御平安を切においのりいたします。

節よりよろしく申しました。

一九六八、三、二四 富田和久

以上

77) このハガキは、橋新の蔵書中の『矢内原忠雄全集』第9巻（岩波書店、1963年）に挟み込まれていた。

78) 富田和久（1920-1991）は物理学者（京都大学）、無教会伝道者。

## Yanaihara Tadao's Letters to Tachibana Hajime: Correspondence between a Non-church Evangelist and a Local Congregation

Tatsuya AKAE  
Yusuke IWANO  
Yasuhiro KUROIWA

### ABSTRACT

This study presents 24 letters exchanged between Yanaihara Tadao (1893-1961), a non-church (Mukyokai) evangelist active in 20th century Tokyo, Japan, and Tachibana Hajime (1902-1973), a non-church Christian in Ehime Prefecture, along with related historical documents. These letters illuminate three significant aspects in the history of non-church Christianity, beginning with Uchimura Kanzo (1861-1930).

First, the correspondence sheds light on the role of letters in the history of the non-church movement. Evangelists presided over Bible meetings, published magazines, and exchanged letters with readers in remote areas. Yanaihara's letters exemplify a remote teacher-disciple relationship.

Second, the letters provide a glimpse into the activities of local non-church Christians. Tachibana served as an intermediary by jointly procuring and disseminating non-church magazines and related books. He also planned and organized the evangelists' lecture tours in his area of residence. Additionally, Tachibana devoted himself to faith-support initiatives for the leprosy sanatorium on Oshima Island in Takamatsu, Kagawa Prefecture.

Third, the correspondence provides background on the congregation's involvement in the Yanaihara Incident (1937) and Tachibana's noteworthy role in safeguarding Yanaihara during this incident. These letters serve as a historical record, showcasing the sustained activities of Christian intellectuals who spoke out during the war and the congregations that supported them.

**Key Words:** non-church Christianity, remote teacher-disciple relationship, leprosy sanatorium, Yanaihara Incident